

signature

date

TARGET: Feb, Jun 2024

直前演習 -3

問1)

SEIRYOU精肉店では、連産品であるヒレおよびロースを連続生産して販売している。

当期までは両品について、生肉からヒレとロースに分解後そのままの状態の販売していたが、翌期において4,230MH（機械時間）の遊休生産能力を活用してロースを追加加工（ロースカツ）する案が浮上している。次の（資料）にもとづいて、①解答用紙の文章について、空欄にあてはまる語句を【語群】から選び、②ロースを追加加工すべきか否かについての意思決定を行い、③解答用紙の文章について、空欄にあてはまる語句を【語群】から選びなさい。

- （資料）
1. 生肉を1kg投入することで、ヒレ0.6kgとロース0.4kgが分離生産される。翌期における生肉の予定投入量は12,000kgであり、生肉代、解体加工等の連結原価は21,175,000円と見積もられている。ヒレの販売価格は1,500円/kg、ロースの販売価格は1,000円/kgである。
 2. ロースを追加加工するにあたっては、追加加工工程の始点でロース1kgに対してパン粉を0.5kg投入する必要がある。パン粉の価格は400円/kgである。また、追加加工に要する変動加工費は、投入量1kgあたり次のように見積もられている。
 直接労務費 2,000円×0.2DLH=400円/kg
 変動製造間接費 800円×0.6MH=480円/kg
 3. ロースの追加加工にあたっては、専用の油揚マシーンをリースする必要があり、リース料は年額863,544円である。
 4. ロースカツの販売価格は1,820円/kgと見積った。

解1)

- ① 本問のロースとヒレのように、同一工程において同一原料から生産される（A）の製品であって、相互に（B）を明確に区別できないものを連産品という。

本問のような、生肉がロースとヒレに分離され、それぞれの量を別々に把握できる点を（C）という。この（C）以前に発生する原価を連結原価という。

この連結原価を連産品に按分する方法には、（D）と市価法がある。さらに、本問のロースのように、追加加工する場合には（E）法と（F）法がある。（E）法によると、（C）後の個別費ないし追加加工費の存在により各連産品の売上利益率は一致しなくなる。そこで、各連産品の売上利益率を一致させるための方法として（F）法が工夫された。

【語群】

相互配賦法 ・ 物量法 ・ 同種 ・ 異種 ・ 主副 ・ 種類 ・ NRV ・ NPV ・
修正NRV ・ 分離点 ・ 原価中心点

A	<input type="text"/>	B	<input type="text"/>
C	<input type="text"/>	D	<input type="text"/>
E	<input type="text"/>	F	<input type="text"/>

- ② ロースをロースカツに追加加工することにより、『 』円の
 （ 差額利益 ・ 差額損失 ）が発生するので、
 追加加工すべきで（ ある ・ ない ）

（注） （ ）内の正しい文字を○で囲み、『 』内には金額を記入しなさい。

- ③ 追加加工量が多くても少なくとも一定額のかかるリース料は、固定費である。当該固定費は、本問の意思決定にとって（G）である。

一方、連結原価は生産量が多ければ多いほど増加する変動費を含んでいる。当該連結原価は、本問の意思決定にとって（H）である。

【語群】

関連収益 ・ 無関連収益 ・ 関連原価 ・ 無関連原価

G	<input type="text"/>	H	<input type="text"/>
---	----------------------	---	----------------------